

チベット訳『宝篋経』一和訳と訳注(3)

五 島 清 隆

〔抄 録〕

第3巻は、アーナンダ、マハー・カーシャパ、プールナ・マイトラヤニープトラの三人の弟子たちによるマンジュシュリー(文殊)の「神通の奇蹟(神変)」に関する回想からなる。文殊の鉢による奇蹟を阻止するために悪魔が悪形の比丘たちを化作し、それを契機に文殊が悪魔に「仏陀の教説」の意味を解説する。また、文殊を告発するマハー・カーシャパの姿が十方の無量世界に現出され、それを契機に文殊の様々な教化方法が示される。さらに、文殊が自らが化作した異教徒たちとともにニルグランタ(裸形行者)の弟子となり、最終的には彼らを仏教に誘導するなど、前巻から続く、文殊の神通による奇蹟と教説による奇蹟がさまざまなプロットによって描かれていく。いずれの場合も、文殊の神通は、教説の奇蹟に導くための演出なのである。釈尊は「神通の奇蹟」を極力控えたとされるが、大乘とくに文殊系の経典では、この「神通の奇蹟」を方便として駆使し、「空・不二」の思想を基盤とする大乘を称揚するのである。

キーワード 文殊師利、神変、阿難、大迦葉、富楼那、ニルグランタ、サティヤカ

1 はじめに

本経第1巻では、文殊とスパーティとの間で菩薩の称讃が説かれたが、第2巻では、文殊の神通の卓越性がシャーリプトラとアーナンダの回想という形で示された。この第3巻では、アーナンダの回想の続きと、マハー・カーシャパとプールナ・マイトラヤニープトラによる回想が語られる。その前半は第2巻から続く文殊と悪魔との「加持」の応酬であるが、アーナンダの回想の中では、「後の五百年」における「正法の滅亡」の予言が注目される。マハー・カーシャパの回想の中では、文殊を告発するマハー・カーシャパという設定と、32の「菩薩の鏡」の解説が重要であろう。また、様々な教化対象に合わせた教化法の中に「3種の奇蹟」が挙げられていることも注目される。後半のプールナ・マイトラヤニープトラによる回想では、

ニルグラント(裸形行者)の教化が示されるが、これは次の第4巻に続いていく。

以下、第3巻の和訳と訳注を提示し、最後に、「3種の奇蹟」の意味を、他の諸文献と比較することで確認することとする。

2 和訳と訳注

第3巻 (bam po gsum pa)⁽¹⁾

VII-3 アーナングの回想(3)⁽²⁾ 奇蹟の鉢

その時、マンジュシュリー(以下、M)法王子は、悪魔(マール・パーピーヤス)とともに、その鉢を〔カレーリ樹の前にある〕⁽³⁾集会所の〔周辺部の〕ところに⁽⁴⁾置いて行きましたが、私は〔そのことについて〕⁽⁴⁾見ることもなく、聞くこともありませんでした⁽⁴⁾。⁽⁵⁾食事時になっても⁽⁵⁾M法王子がその僧房⁽⁶⁾から出たり、あるいは、入ったりするところを私は見ませんでした。そこで、私は、『M法王子は比丘の僧団を欺いたのではないだろうか。私は世尊のもとにいて、これらの事情をご報告しよう』と考えました。そう考えて、私は世尊のところに行きました。行って、〔世尊の〕両足に頭をつけて礼拝し、世尊に次のように申し上げました。『世尊よ、食事時になりましたが、M法王子はその僧房から出て来ませんでした』

世尊が私に仰せになる。『アーナングよ、汝はあの集会所の周辺部で何も目にしなかったのか』

私が世尊に申し上げる。『世尊よ、そこには食べ物で満たされた鉢が一つありました』

世尊が私に仰せになる。『アーナングよ、行って [H 419b] 木板⁽⁷⁾を叩いて比丘の僧団を集めなさい』

私が世尊に申し上げる。『世尊よ、⁽⁸⁾これらの比丘の僧団はたくさんいますので、満杯とはいえ、たった一つの鉢の食べ物ではどうしようもありません⁽⁸⁾』

世尊が [P 295b] 私に仰せになる。『アーナングよ、⁽⁹⁾心を煩わせることはしないように⁽⁹⁾。アーナングよ、⁽¹⁰⁾もし、三千大千世界に属するすべての人々が、十万年のあいだ、たった一つのその鉢から食べたとしても、その鉢〔の中身〕が尽きてしまうことはないであろう⁽¹⁰⁾。なぜなら、その鉢は、M法王子がその加持〔力〕によって加持しているからである。〔このような〕M法王子の施与の完成(布施波羅蜜)は、尽きることのない功德から生じたのである』

私は、世尊から〔このように〕伺って、心喜び、木板をたたいて比丘の僧団を集めました。

そのとき、M法王子は木板の音を聞いて、[Zh 704] 彼ら天子たちや菩薩たちを伴って、自分の僧坊から出て、集会所の周辺に行くと、その鉢から、⁽¹¹⁾美味な固い食べ物、柔らかい食べ物、楽しむべき物(デザート)⁽¹¹⁾がまるで別々の器にそれぞれ盛られているかのように互いに混ざらない状態になっているものが、普通に、取り出されました⁽¹²⁾。[H 420a]〔その結果〕多くの比丘たちは、すべて、元気をとり戻しました。多くの菩薩たちも、すべて、満足し

ましたが、その食が尽きてしまうことはありませんでした。

VII-4 アーナンダの回想(4) 毒

そのとき悪魔はM法王子の邪魔をしようとして、4万人の比丘たちを化作しました。彼らは、內衣や上衣を正しく着ておらず、外見がよくなく、〔持っている〕鉢はひびが入って壊れており、弊衣を身に纏い⁽¹³⁾、鼻は扁平で⁽¹⁴⁾、片目が見えず⁽¹⁵⁾、歩行が不自由です⁽¹⁶⁾。彼らの中には、異様に背が高い者、異様に背が低い者、異様に色の黒い者、異様に色の白い者、異様に痩せている者、異様に太っている者、異様に身体が湾曲している者、異様に小さい者がいます。彼らは、⁽¹⁷⁾下は年少者から上は長老に至るまでの人たちに敬意を示してはいましたが、沢山の人の集まりを目にして怯えていました⁽¹⁷⁾。彼らにも、その鉢 [P 296a] から、美味な固い食べ物、柔らかい食べ物、楽しむべき物(デザート)が、普通に、⁽¹⁸⁾取り出されましたが、〔取り出しても〕取り出しても⁽¹⁸⁾、その鉢は〔中身が〕尽きることはありませんでした。

その時、悪魔が化作したそれらの比丘たちは、⁽¹⁹⁾それぞれ、お粥(*odana)を、マガダ地方の〔計量単位であるドローナで〕10ドローナずつ、食べましたが⁽¹⁹⁾、満足することはありませんでした。〔悪魔は〕そのように加持していたのです。

その時、⁽²⁰⁾給仕をする人たち⁽²⁰⁾は、[H 420b] みな、疲れてしまいましたが、彼ら(化作された比丘たち)を満足させることは出来ませんでした。

その時、M法王子は、[Zh 705] それらの比丘たちが、〔自分たちの〕鉢を満杯にし、手も塞がり、口いっぱい頬張ったまま、口に入ったものを呑み込むこともできず⁽²¹⁾、彼らが喉を詰まらせて目を白黒させて大地に倒れてしまう⁽²²⁾よう、加持しました。

その時、M法王子は悪魔にこう言いました。『パーピーヤスよ、あなたの比丘たちは、どうして、食べ物を食べないのですか』

悪魔が言う。『私の比丘たちは死にそうになっています。あなたは毒を混ぜた食べ物を与えたのではないですか』

Mが言う。『[私のような] 毒を持たない人間が毒を与えたりすることなどありえましょうか。毒を養う人こそが毒を与えるのであって、毒を養うことのない人が毒を与えることはしません。パーピーヤスよ、毒というのは、つまり、貪り・怒り・愚かさのことです。それらでさえ、よく守られた教え(法)と規律(律)のもとでは存在しないのです。』

毒というのは、無知なること(無明)、輪廻的存在への渴望(有愛)、私と私のものという思い(我・我所)、⁽²³⁾〔ものの究極的な〕原因を見ること⁽²³⁾、⁽²⁴⁾精神的なものと物質的なもの(名色)〔を見ること〕⁽²⁴⁾、愛欲、怒り、自らを見ること、他を見ること、〔智慧を〕覆うもの(蓋)、纏わりつくもの(纏)、存在構成要素(五蘊)への執着[H 421a]、認識構成要素(十八界)への思い込み、認識領域(十二処)への執着、対象領域(*viṣaya)への執着、輪廻的存在領域(三界)への執着、⁽²⁵⁾まとめては散らすこと、下げては上げること⁽²⁵⁾、死没、誕生、

往来、[P 296b] 身体への執着、生命への渴望、悪しきものへの気持ちの傾倒、顛倒した考えに
 いること、〔ものは諸〕縁によって生じる〔とする考え〕[Zh 706] に従わないこと、〔もの
 は〕断滅するという見解、〔ものは〕常住であるという見解、〔人は〕輪廻するという見解、
 〔ものは〕壊滅するという見解、動揺、慢心、思考、分別、空虚(*tuccha)、束縛(*grantha)、
 愛着(*ālaya)、決定的な拠り所⁽²⁶⁾、渴望、在家を喜ぶこと、取捨すること、空性を恐れるこ
 と、〔ものには〕特質がないことをまるで懸崖のように思うこと、願望〔の対象になるもの〕
 がないことをまるで殺害者のように思うこと、対象となるものは存在しないのにそれを実在す
 るものように思うこと、決定的な離脱を過失のように見ること、⁽²⁷⁾〔輪廻の〕暴流を渡ること
 を思うこと⁽²⁷⁾、覚りへと向かう法を法ではないと思うこと、真正な見解を顛倒した見解と
 思うこと、顛倒した見解を [H 421b] 真正な見解と思うこと、〔仏・菩薩などといった〕良き
 友(善知識)を悪しき友と思うこと、悪しき友を良き友と思うこと、仏陀に従わないこと、教
 法を棄てること、僧団を尊敬しないこと、人のいない閑かな林(*araṇyāyatana)を喜ばない
 こと、慢心、増上慢、我ありとの慢心を棄てていないこと、⁽²⁸⁾よく理解したとして論争の火
 を燃やすこと⁽²⁸⁾、真実を虚偽と思うこと、虚偽を真実と思うこと、欲望を功德と思うこと、
 作られたもの(有為)を真実と思うこと、輪廻には十種の長所があると思うこと、⁽²⁹⁾涅槃に
 は十種の恐ろしいものがあると思うこと⁽²⁹⁾、以上のような事柄(法)が毒なのである。

VII-5 アーナンダの回想(5) 仏陀の教説

パーピーヤスよ、それらは、善く語られた [Zh 707] 法と律には存在しません。なぜなら、
 仏陀の教説(*deśanā)は甘露の教説だからです。仏陀の教説は安楽の [P 297a] 教説です。
 仏陀の教説は戯論のない教説です。仏陀の教説は非難さるべきことのない教説です。仏陀の教
 説は⁽³⁰⁾〔特定の人と〕馴染みになることのない⁽³⁰⁾教説です。仏陀の教説は出離⁽³¹⁾の教説です。
 仏陀の教説は争いごと⁽³²⁾のない教説です。[H 422a] 仏陀の教説は苦悶⁽³³⁾のない教説です。
 仏陀の教説は自にも他にも固執することのない教説です。仏陀の教説は慈心のある⁽³⁴⁾教説で
 す。

仏陀の教説は家、避難所(*śaraṇa)、中洲(*dvīpa)、最後の拠り所(*parāyaṇa)となる
 教説です。仏陀の教説は制御、寂静、平静、平穩の教説です。仏陀の教説は清浄、清潔、清澄、
 清明の教説です。仏陀の教説は正しい修行の教説です。仏陀の教説は混乱のない教説です。仏
 陀の教説はよく制御された教説です。⁽³⁵⁾仏陀の教説はきわめて清浄な教説です。仏陀の教説
 は称讃・讃嘆の教説です。仏陀の教説は寂静と平静とを決定的なものとして〔説く〕教説です。
 仏陀の教説は解脱、離脱、完全な解放の教説です。⁽³⁵⁾仏陀の教説は⁽³⁶⁾あらゆる異説を唱える
 者(*parapravādin)たちを法に従って論破する⁽³⁶⁾教説です。仏陀の教説はあらゆる魔を撃退
 する教説です。仏陀の [Zh 708] 教説は誕生・死去・生起 [H 422b] から出離する教説です。

正念に住するので正念の教説(四念処)です。あらゆる悪をなさないので正しく〔煩惱を〕

断ずる教説(四正断)です。身心が軽快なので神通力の基礎になる教説(四神足)です。信を第一〔の要素〕として〔覚りに向かう〕能力という教説(五根)です。あらゆる煩惱[P 297b]によって打ち碎かれることがないので〔覚りに向かわせる〕力という教説(五力)です。〔心の状態に〕応じて理解していくので覚りの支分という教説(七覚支)です。出離するので道の教説(八正道)です。

心が静まるので平静(**samatha*)が教説です。解脱を生じるので観察(**vipassanā*)が教説です。欺き誘うこと⁽³⁷⁾(**vañcana*)がないので真実(**satya*)が教説です。意味と教法と決定的な言葉と巧みな弁舌に障碍がないので自在で滞ることのない表現能力(**pratisamvid*)が教説(四無礙智)です。⁽³⁸⁾作られたもの(有為)を咎める(強く否定する)〔ことになる〕ので無常と苦について正しく語ることが教説です。⁽³⁸⁾ ⁽³⁹⁾あらゆる異教(**pāṣaṇḍa*)を棄てる⁽³⁹⁾ので無我が教説です。涅槃に向かうので寂静が教説です。彼岸に行く(**pāram itaḥ*)ので波羅蜜(**pāramitā*)が教説です。人々を〔仏道へと〕収め取る(**saṃgraha*)ので方便が教説です。怒りの心がないので慈しみ(慈)が教説です。危害を加えることがないので憐れみ(悲)が教説です。喜びのない状態を除去するので喜び(喜)が教説です。成すべき事を成就するのでこだわりのない平等心(捨)が教説です。驕慢がないので知(**jñāna*)⁽⁴⁰⁾が教説です。菩提心を[H 423a]起こすので三宝の家系を断絶しないことが教説です。再生を受けることがないのであらゆる安楽に従うことが教説です。

VII-6 アーナンダの回想(6) 仏陀の微笑と予言

〔仏陀の〕教説に関するこの説明が教示された時、悪魔とともにやってきていた天子たちの中から五百の天子が無上正等覚への心を起こしました。彼らは、『世尊よ、[Zh 709] 私たちもまた、そのような仏陀の教説に従えますように』という言葉を発表しました。

〔それをお聞きになられて〕世尊は微笑まれました。私は微笑まれた理由をお尋ねしました。尋ねられて、世尊は、このように仰せになられました。『アーナンダよ、これらの魔が化作した比丘たちを、汝は見たかな』

私は世尊にこう申し上げました。『世尊よ、見ました。スガタ(善逝)よ、[P 298a] 見ました』

世尊は私にこう仰せになられました。『アーナンダよ、後の時代、後の時節、後の五百年が続く間に、正しい教え(正法)が滅するときに私の教説のもとには、その多くが以下のような比丘たちが生じるであろう。つまり、⁽⁴¹⁾內衣や上衣を正しく着ておらず、衣をだらしなく着ており⁽⁴¹⁾、〔持っている〕鉢は壊れており、明確な自覚というものがなく、日々の振る舞いがきちんとしておらず、手には[H 423b] 棒を持ち、鼻は扁平で、片目が見えず、歩行が不自由であり、身体の外見がよくなく、種々の病気に打ちのめされたものたちである。なぜなら、アーナンダよ、このように、その時代には、比丘たちはその大半が、奉仕されることを目

的とし、敬意を表されることを頼みとし、⁽⁴²⁾〔自分の〕様々な成すべき事で常に忙しく⁽⁴²⁾、律を棄て、それぞれの解脱のための〔防非防悪の〕戒(別解脱戒)を犯し、制限された区画・領域(結界)を超えてしまい、⁽⁴³⁾現在のことを求め、次の生のごことは求めないであろう⁽⁴³⁾。彼らは、このように、法のためではなく、奉仕を受けるために、片目が見えず、歩行が不自由であり、身体の外見がよくなく、種々の病気にうちめされながらも、やって来て、やって来た彼らは、出家をし、〔Zh 710〕戒を授かるのである。アーナンダよ、その時節、その時代には、私のこの教説を見るにふさわしい者も、聞くにふさわしい者も、いないであろう。神々は喜ばないであろう。⁽⁴⁴⁾魔たちは喜悅し喜び、また、平静(*upekṣā)になるであろう⁽⁴⁴⁾』

私は世尊にこのように申し上げた。『世尊よ、なにゆえに、悪魔たちは、喜悅し、喜び、また、平静になるのでしょうか』

世尊が仰せになる。『アーナンダよ、〔H 424a〕このように、これらの愚かな者たちは、自ら、魔の行いをしているのであって、彼らを邪魔しようとして、繰り返し、悪魔が努力しているわけではない。なぜなら、悪魔は〔P 298b〕努力することのない者たちの隙につけ入ることはしないからである。悪魔は、再生することがないようにと⁽⁴⁶⁾頭や衣服⁽⁴⁵⁾が燃えている者のようにして⁽⁴⁶⁾精励している比丘たちの隙につけ入るのである。アーナンダよ、それゆえ、まだ得ていない人が得るように、まだ理解していない人が理解するように、まだ悟っていない人が悟るようにと、実践しなさい。励みなさい。努力しなさい。魔の仲間たちを制圧しなさい。如来の教説を輝かせなさい。正しい教え(正法)を護持しなさい。私に対して法の供養で礼拝しなさい。これが私の汝に対する教え(*anuśāsana)である』

この教説が語られた時、五千人の比丘たちが、寿命(*āyuhṣaṃskāra)を捨てて、『私たちが世尊の正しい教えが減びてしまうのを見ることがありませんように』という言葉をお口に、空中に跳び上がり、⁽⁴⁷⁾自らの火の元素(火界)によって自分自身を〔Zh 711〕焼いてしまいました⁽⁴⁷⁾。十万の天子たちが彼らを供養〔H 424b〕しました。二百の比丘たちは⁽⁴⁸⁾〔諸〕法に関する法の眼が塵なく、汚れから離れ、清浄になりました⁽⁴⁸⁾。二百の比丘たちは、執着がなくなって、その心は諸々の煩惱(漏)から自由になりました。三万二千の菩薩たちは、諸存在が〔本来〕不生であることを容認する知(無生法忍)を得ました。シャクラ神、ブラフマー神、〔4人の〕世間を守る神たちは、〔それぞれの〕眷属を伴い、世尊の前に合掌し、世尊にこのように申し上げました。『世尊よ、私たちが世尊の正しい教えが減びるのを見ることがありませんように。世尊よ、この法門を耳にする人たちの心が怠慢の汚れに捕らえられることが決してありませんように。彼らが次々と生じる魔の行いに支配されませんように。世尊よ、〔あなたが〕寿命長く〔この世界に〕止まって下さり、〔私たちをそのように〕お守り下さるようお願い致します』と。〔その時、私はこれを聞いて気絶して倒れてしまいました〕⁽⁴⁹⁾

具寿シャーリプトラよ、M〔P 299a〕法王子の神通の自由な発揮(*ṛddhivikurvita)と法の教示の自由な発揮(*dharmadeśanāvīkurvita)の中で、私がわずかながら目の当たりにし

たものは、このようなものなのです」

VIII-1 マハー・カーシャパの回想(1) 告発の打板

その時、具寿マハー・カーシャパが具寿シャーリプトラにこのように言った。「具寿シャーリプトラよ、私もまた、[H 425a] ⁽⁵⁰⁾M法王子の神通力の奇蹟 (*ṛddhiprātihārya) をいささか目の当たりにしました⁵⁰⁾。具寿シャーリプトラよ、私は思い出しますが、世尊が完全な覚りを得られてから遠くない頃のことです。私もまた出家してそれほど経過していない時に、M法王子が、⁽⁵¹⁾ラトナケート (宝を印とする者) [という] 世尊・如来 [Zh 712] の仏国土から⁵¹⁾、〔シャークヤ・ムニ〕世尊にお会いし、礼拝し、敬意を表するために、この〔須弥山〕世界に、初めて⁽⁵²⁾、やって来ました。〔その時〕世尊は⁽⁵³⁾、このシュラーヴァステイーのジェータ王子の林、アナータピンダダの園林において⁽⁵⁴⁾雨安居にあることを公言しておられました⁵⁴⁾。M法王子も、そこにおいて、⁽⁵⁵⁾三ヶ月の雨安居にあることを公言していました⁵⁵⁾が、世尊の前でも、僧団の中でも、会堂⁽⁵⁶⁾においても、布薩 (*poṣadha)⁽⁵⁷⁾〔の時〕にも、礼拝の儀式⁽⁵⁸⁾においても、私たちは〔彼の姿を〕全く見かけませんでした。

その時、三ヶ月の雨期が過ぎて、⁽⁵⁹⁾〔安居の最後の日に行われる〕布薩と〔罪の告白と懺悔を行う〕自恣 (*pravāraṇa) の時に、M法王子は顔を現しました⁵⁹⁾。

私は彼にこう言いました。『Mよ、あなたは雨期のこの三ヶ月間、どこにいたのですか』

彼が言う。『具寿マハー・カーシャパよ、[H 425b] ⁽⁶⁰⁾まさにこのシュラーヴァステイー大城のプラセーナジット王妃のところに〔いました〕⁶⁰⁾』と。

それについて私は〔とても不愉快になり〕⁽⁶¹⁾こう考えました。『⁽⁶²⁾罪を犯しているこのような人が⁶²⁾、きわめて清浄な比丘の僧団と一緒に⁽⁶³⁾自恣を行う⁶³⁾のは [P 299b] 相応しくない』と。そう考えて、私は、その集会所⁽⁶⁴⁾を出て、M法王子を放逐する⁽⁶⁵⁾ために木板を叩きました。

それについて、世尊は、M法王子にこう仰せになる。『Mよ、⁽⁶⁶⁾大徳マハー・カーシャパは、なにゆえに、木板を叩いたのか考えてみなさい⁶⁶⁾』

彼はこう申し上げる。『世尊よ、考えてみましたが、私を放逐するためです』

世尊が仰せになる。『Mよ、⁽⁶⁷⁾汝に対する〔マハー・カーシャパの〕大きな不信を引き起こすことのないよう、[Zh 713] 自らを清浄にしなさい。自らの〔神通力が及ぶ〕範囲 (*gocara) を示しなさい。偉大な声聞たちを喜ばせてあげなさい⁶⁷⁾』

さて、M法王子は、その時、「すべての仏国土を明らかに示す」という菩薩の三昧に入りました。ついで、M法王子がその三昧に入るとすぐに、その時、十方にあるガンガー河の砂の数ほどの〔無数の〕仏国土において、〔その〕頭陀の功德 (*dhūtaguṇa) が喧伝されている [H 426a] マハー・カーシャパにそっくりの人がおり、そのすべてが、M法王子を放逐するために木板を叩いているのを見えました。

世尊が私にこう仰せになる。『カーシャパよ、なにゆえ、木板を叩くのか』

私は世尊にこう申し上げる。『世尊よ、かのM法王子は、雨期の三ヶ月間を⁽⁶⁸⁾後宮 (*antah-pura) で過ごした後⁽⁶⁸⁾、きわめて清浄な比丘の僧団と共に⁽⁶⁹⁾自恣を行おうとしている⁽⁶⁹⁾からです。彼を放逐するために私は木板を叩いたのです』

その時、世尊は全身から光を放たれ、私に次のように仰せにられました。『カーシャパよ、十方において何が見えるか、まず⁽⁷⁰⁾、見なさい』

私はその時、見てみましたが、十方にあるガンガー河の砂の数ほどの無数・無量の世界において、大徳である私そっくりの人がおり、そのすべてが、M法王子を放逐するために木板を叩いているのが見えました。それらの [P 300a] すべての世界において、M法王子がそれらの [世界の] 仏陀・世尊に近侍しているのも見えました。

世尊が私にこのように仰せになる。『マハー・カーシャパよ、[Zh 714] 汝は、私の前にいるこのM法王子と、[H 426b] 十方にある無数・無量の世界の [それぞれの] 仏陀・世尊の足下にいる [M法王子] と、いったいどちらを放逐したいのか』

⁽⁷⁴⁾私はその時、⁽⁷¹⁾不思議な思いに駆られ⁽⁷¹⁾、その木板を地に捨てようと思いましたが、捨てることができず、⁽⁷²⁾途切れることなく [木板の] 音は出ていました⁽⁷²⁾。[この世界の] ジェータ太子の林においてと同じように、あらゆる仏国土においても、⁽⁷³⁾[その音は] 途切れることなく、増すことなく、[新たに] 生じることのないように見えていました⁽⁷³⁾。⁽⁷⁴⁾

[世尊が私に言う。『自ら、Mに帰依すれば [この状態から] 脱することが出来る』私は直ちにMを遠くから礼拝しましたが、そうしてやっとその木板は地に墮ちました。]⁽⁷⁵⁾

VIII-2 マハー・カーシャパの回想(2) 教化の手法

私は、その時、世尊の両足に礼拝し、世尊にこう申し上げました。『世尊よ、私は部分的な [限定された] 知しか持っておりません。無量の境界をもつ菩薩たちの活動領域を弁えることなく、木板を叩いてしまいました。⁽⁷⁶⁾M法王子への懺悔を申し上げたいと思います⁽⁷⁶⁾』

世尊が私に仰せになる。『マハー・カーシャパよ、汝には、このM法王子にそっくりな者が仏国土にいるのが見えているが、[彼らはその] すべてにおいて、在家者の家において人々を成熟させるために、3ヶ月間の雨期を過ごしていたのである。マハー・カーシャパよ、このM法王子は、このシュラーヴァスティ大城にある後宮において⁽⁷⁷⁾雨期を過ごしていることを公言していたが⁽⁷⁷⁾、プラセーナジット王の後宮から [H 427a] 五百人の女性たちを、無上正等覚から退転しないように成熟させたのである。五百人の男性たち、五百人の少年たち、五百人の娘たち、五百人の娼婦⁽⁷⁸⁾たちをも無上正等覚から退転しない [境地] に [Zh 715] [P 300b] 置き、また、多くの人々を声聞の乗り物 (教え) へと導いて、[彼らが] 天界に行くようにしたのである』

私は世尊にこう申し上げる。『世尊よ、どのような法を説いてM法王子は、あのような [多

くの] 人々を成熟させたのでしょうか』

世尊が仰せになる。『マハー・カーシャパよ、それゆえ、どのような法を説いてあのような [多くの] 人々を成熟させたのかと、汝がこのM法王子に問いなさい。彼自身が汝に答えることであろう』

私はM法王子にこう言う。『Mよ、あなたはどのような法を説いてあのような [多くの] 人々を成熟させたのですか』

Mが言う。『大徳マハー・カーシャパよ、あのような人々は法の教示によっては成熟しません。なぜなら、大徳マハー・カーシャパよ、楽しい [H 427b] 遊戯によって成熟する人がいます。親切⁽⁷⁹⁾、抑圧⁽⁸⁰⁾、施与、貧窮、大いなる飾り⁽⁸¹⁾、⁽⁸²⁾→世俗的な奇蹟 (**saṃvṛtiprātihārya*)、教誡による奇蹟 (**anuśāsanaprātihārya*)、神通による奇蹟 (**ṛddhiprātihārya*)⁽⁸²⁾、シャクラ神の姿、ブラフマー神の姿、世間を守る神たちの姿、転輪聖王の姿、仏陀の姿、独覚の姿、声聞の姿、恐怖による攻撃⁽⁸³⁾、粗野な言葉、甘美な言葉、恩恵 (**anugraha*) によって成熟する人たちがいます。なぜなら、大徳マハー・カーシャパよ、人々の行動は [Zh 716] 種々雑多だからです。⁽⁸⁴⁾→彼らは、その対応法もまた種々雑多なものによって成熟するのです⁽⁸⁴⁾。大徳マハー・カーシャパよ、そのように、人々を成熟させたその後、法を説いて、正しく教化するのです』

私が彼に [P 301a] こう言う。『Mよ、あなたはどれだけの人々の世界 (衆生界 **sattvadhātu*) をこの行動によって成熟させたのですか』

彼が言う。『大徳マハー・カーシャパよ、法の世界 (法界 **dharmadhātu*) の量ほどです』

[私が] 言う。『Mよ、法の世界とはどれだけのものですか』

[Mが] 言う。『空間の世界 (虚空界 **ākāśadhātu*) の量ほどです』

[私が] 言う。『空間の世界とは、また、[H 428a] どれだけのものですか』

[Mが] 言う。『人々の世界の量ほどです。大徳マハー・カーシャパよ、そのように、法の世界と空間の世界と人々の世界は、不二であって、二なるもの (別のもの) として分けられないのです⁽⁸⁵⁾』

VIII-3 マハー・カーシャパの回想(3) 仏陀の出現

私が彼にこう言う。『Mよ、⁽⁸⁶⁾→このように [成熟する段階に止まって] 誰も涅槃する者がいないのであれば、その場合、仏の出現 (**buddhotpāda*) は無意味なことにならないでしょうか⁽⁸⁶⁾』

彼が言う。『大徳マハー・カーシャパよ、たとえば、ある男が、⁽⁸⁷⁾→胆汁による熱病に襲われて⁽⁸⁷⁾種々のことを口走ると⁽⁸⁸⁾、その時、別の人が、この男のことを憑きもの (鬼神 **graha*) に襲われていると考えるとしよう。そこに、ある医療に巧みな者がやって来て、その男に酥⁽⁸⁹⁾を飲ませるなどして胆汁による熱病を鎮めると、その男は、間もなく種々のことを口走ること

はなくなつたとしよう。その場合、大徳マハー・カーシャパよ、これをどう思いますか。彼〔の身体から〕からデーヴァ(神)やナーガ(龍)やヤクシャ(夜叉)〔といった類いの憑きもの〕が出ていったのでしょうか』

私が彼にこう言う。『Mよ、そうではありません。そうではなくて、酥を飲ませるなどして、その胆汁が鎮まったのです』[Zh 717]

Mが言う。『大徳マハー・カーシャパよ、その医師はその男に多大な利益を与えたのではないですか』[H 428b]

私が彼にこう言う。『Mよ、仰る通りです』

彼が言う。『大徳マハー・カーシャパよ、同じように、顛倒という熱病に襲われている世間の人たちは、無我なるものを我と構想し、無我なるものを我と執着して、輪廻のなかを流転しています。その場合、[P 301b] 大悲を具えた仏陀・世尊たちは、世間に出現し、それぞれ〔に相応しい〕〔比喻による〕話⁽⁹⁰⁾、それぞれ〔に相応しい〕法へと導く門によって、我の構想〔の実態〕をよく理解させ、顛倒〔した考え〕を捨てさせるために、それらの人々のために法を説きます。彼らは、法を聞いて後、あらゆる構想から離れ、二度と執着することがなくなり、彼らは、我の構想を捨てて〔輪廻の〕を瀑流(*ogha)を渡ります。彼らは、「渡り終わり、向こう岸に到達し、完全なる涅槃に入った人」と呼ばれます。大徳マハー・カーシャパよ、このことをどう思いますか。その場合、我(*ātman)、魂(*sattva)、生命(*jīva)、精神(*jantu)、個体(*pudgala)とかいう〔主体なるものがあって〕、それが完全に涅槃するということがあるでしょうか』

私が彼に言う。『Mよ、そのようなことはありません。そうではなくて、平等性(*samatā)が正しく説かれたことで顛倒が捨てられるのです』

Mが言う。『大徳マハー・カーシャパよ、⁽⁹¹⁾このような理由から、仏陀は出現するのです。[H 429a] つまり、平等性を正しく説くためなのです⁽⁹¹⁾。生のためでも、滅のためでもなく、煩惱は〔本来〕存在しないということのみを理解させるためなのです。

VIII-4 マハー・カーシャパの回想(4) 菩薩の鎧

私が彼にこう言う。『Mよ、[Zh 718] 菩薩たちが、そのような本性(*prakṛti)の法の世界(法界)を理解し、人々を完全に成熟させようという〔誓願の〕鎧⁽⁹²⁾を捨てず、⁽⁹³⁾萎縮することなく、狂喜することなく⁽⁹³⁾、⁽⁹⁴⁾本性として涅槃している人々⁽⁹⁴⁾のために、〔誓願の〕鎧を身に着けることは、成しがたいことです。』

彼が言う。『大徳マハー・カーシャパよ、そのように、菩薩大士は、偉大な〔誓願の〕鎧を身に着けるのです』

私が彼にこう言う。『Mよ、あなたは、菩薩の鎧について、〔ひらめきによって〕明らかにな〔ったことを語って〕下さい』

Mが [P 302a] 言う。『大徳マハー・カーシャパよ、菩薩の偉大な鎧は、32あります。それらの鎧を身に着けた菩薩たちは菩薩の行動を実践します。32とは何かと言えば、大徳マハー・カーシャパよ、(1) 夢という本性をもつという特質ゆえに、無量の輪廻を収め取ること (*saṃgraha) が [H 429b] 菩薩の鎧です。(2) 無我という特質ゆえに、無量の人々を成熟させることが菩薩の鎧です。(3) 法身という特質ゆえに、無量の仏陀に供養・恭敬することが菩薩の鎧です。(4) 木霊⁽⁹⁵⁾に等しいという特質ゆえに、仏陀のすべての言葉を聞いて護持することが菩薩の鎧です。(5) ⁽⁹⁶⁾法の世界 (法界) に集約 (*samavasaraṇa) する⁽⁹⁶⁾という特質ゆえに、すべての仏陀の法を守護することが菩薩の鎧です。(6) 煩惱はすべて本性として清浄であるという特質ゆえに、すべての魔を調伏することが菩薩の鎧です。(7) 有と [Zh 719] 無を排除する縁起に入るといふという特質ゆえに、⁽⁹⁷⁾すべての敵対する論者 (*parapravādin) を法に従って制圧 (教化) する⁽⁹⁷⁾ことがすべて菩薩の鎧です。(8) ⁽⁹⁸⁾すべての集積 (*skandha) を捨てる⁽⁹⁸⁾という特質ゆえに、一切を喜捨することが菩薩の鎧です。(9) 作られられないことがない (*anabhisamskāra) という特質ゆえに、⁽⁹⁹⁾戒と学処と頭陀の功德によってあらゆる節制 (*saṃlekha) を受け入れること (*samādāna)⁽⁹⁹⁾が菩薩の鎧です。(10) 怒りが無いという特質ゆえに、忍耐と規律と柔和が [H 430a] 菩薩の鎧です。(11) 身心が遠離するといふ特質ゆえに、取捨のない精進が菩薩の鎧です。(12) あらゆる依り所が遠離するといふ特質 [P 302b] ゆえに、禪定と解脱と三昧と等至 (*samāpatti) のすべてが菩薩の鎧です。(13) 無明の闇といふ [間違った] 見解が清浄になるという特質ゆえに、障碍のない智慧の完成 (般若波羅蜜) が菩薩の鎧です。(14) 成すべきことをすべて教示するといふ特質ゆえに、偉大な方便が菩薩の鎧です。(15) 障碍がないという特質ゆえに、大慈 (慈しみの心) が菩薩の鎧です。(16) ⁽¹⁰⁰⁾五指と空間は同じである⁽¹⁰⁰⁾という特質ゆえに、大悲 (憐れみの心) が菩薩の鎧です。(17) 疲労することがないという特質ゆえに、大喜 (他者の喜びを自らの喜びとする心) が菩薩の鎧です。(18) 楽しいことも苦しいこともしないという特質ゆえに、大捨 (平静で平等な心) が菩薩の鎧です。(19) ⁽¹⁰¹⁾解脱が掌中に入って来たとしても [それを] 掴むことは [Zh 720] しない⁽¹⁰¹⁾という特質ゆえに、⁽¹⁰²⁾あらゆる意向 (*āśaya) を満足させるという特質⁽¹⁰²⁾が菩薩の鎧です。(20) ⁽¹⁰³⁾煩惱のない [正しい悟りの境地] (*niyāma 正位) に陥らない⁽¹⁰³⁾ [H 430b] という特質ゆえに、⁽¹⁰⁴⁾あらゆるものに精神集中しないこと⁽¹⁰⁴⁾が菩薩の鎧です。(21) 幻の如き法を正しく理解するといふ特質ゆえに、死刑執行人 (*vadhaka) の如き五蘊 (身心) をよく防護することが菩薩の鎧です。(22) 法の世界 (法界) は平等であるという特質ゆえに、[世界を構成する] 四元素を毒蛇 (*āśiṣa) の如きものであると理解することが菩薩の鎧です。(23) あらゆる対象 (*gocara) に執着しないという特質ゆえに、六つの感覚器官 (六処) を空虚な村⁽¹⁰⁵⁾の如きものだと理解することが菩薩の鎧です。(24) 愛着 (*ālaya)⁽¹⁰⁶⁾がないという特質ゆえに、三界とは深い関係をもたないことが菩薩の鎧です。(25) 輪廻的生存 (*bhava) を排除しているという特質ゆえに、

⁽¹⁰⁷⁾意図をもって輪廻の生存を受け入れる⁽¹⁰⁷⁾のが菩薩の鎧です。(26) 退転しないという特質ゆえに、偉大な勇気が菩薩の鎧です。(27) あらゆる人々にそれぞれに相応しく法の薬を処方するという特質ゆえに、偉大な医師であることが [P 303a] 菩薩の鎧です。(28) 三つの乗り物の〔それぞれに応じた〕道を教示するという特質ゆえに、偉大な隊商のリーダー (*sārthavāha) であることが菩薩の鎧です。(29) すべての仏陀についてその業績を理解し感謝するという特質ゆえに、〔仏・法・僧〕三宝の家系を断たないことが菩薩の鎧です。(30) 生じることがない法を容認〔する知〕(無生法忍)を獲得するという特質ゆえに、あらゆる法は本性として生じることが [H 431a] ないという特質が菩薩の鎧です。(31) すべての声聞・独覚の階位 (*bhūmi) を超えているという特質ゆえに、不退転の階位を獲得することが菩薩の鎧です。(32) 心の一瞬一瞬に伴う [Zh 721] 智慧によって仏陀のあらゆる法をその通りに理解するという特質ゆえに、荘厳された悟りの座が菩薩の鎧です。大徳マハー・カーシャパよ、菩薩の32の偉大な鎧は以上の通りです。それらの鎧を身に着ければ、たとえ〔不変とされている〕四大元素が変化することがあったとしても、菩薩が無上正等覚から退転する恐れはありません』

私が彼にこう言う。『Mよ、それらの鎧の中の一つも、声聞と独覚たちにはありません』

彼が言う。『大徳マハー・カーシャパよ、それゆえ、声聞と独覚たちは、偉大な鎧を身に着けてはいない、と言われるのです。大徳マハー・カーシャパよ、このことをどう思いますか。⁽¹⁰⁸⁾力のある弓の指導者が身に着けるべき鎧を、普通の人が身に着けられるでしょうか⁽¹⁰⁸⁾』

私が彼にこう言う。『Mよ、そのようなことはありません。普通の人は [H 431b] その鎧を身に着けることは出来ません』

[Mが] 言う。『大徳マハー・カーシャパよ、同じように、菩薩が身に着けるべき鎧を、すべての声聞や独覚は身に着けることはしません。』

[Mが] この菩薩の鎧について語った時、1万2千の天子たちが無上 [P 303b] 正等覚に向けて発心しました。具寿シャーリプトラよ、私とその幾分かを目の当たりにしたM法王子の神通の奇蹟と法の教示の奇蹟とは、以上のようなものでした』

IX-1 プールナ・マイトラヤニープトラの回想(1) ニルグランタ(裸形行者)たち

その時、具寿プールナ・マイトラヤニープトラは具寿シャーリプトラにこう言った。

『具寿シャーリプトラよ、私も [Zh 722] M法王子の神通の奇蹟をいくつか目の当たりにしました。具寿シャーリプトラよ、私は思い出すのですが、ある時、世尊は⁽¹⁰⁹⁾ヴァイシャーリー市の大林 (*Mahāvana) にある重閣講堂 (*Kūṭāgārasāla)⁽¹⁰⁹⁾に、⁽¹¹²⁾五百人ほどの比丘からなる比丘の大僧団とともにおられました。具寿シャーリプトラよ、その時、⁽¹¹¹⁾ニルグランタ⁽¹¹⁰⁾の女性の息子であるサティヤカ⁽¹¹¹⁾が、6万人のニルグランタたちに囲まれ、伴われ、恭敬され、尊重され、尊敬され、供養されて、ヴァイシャーリー市にいました⁽¹¹²⁾。[H 432

a] 私は三昧に入って、彼ら異教徒たちの善根（果報をもたらす善い行為）を観察すると、そこには私が教化すべき百人もの多くの異教の人々〔がいる〕が見えたので、私はそこに行って彼らに法を説きました。彼らは、私が説く法を、聞きたいと思うこと（*suśrūṣakāra）なく、耳を傾けて（*avahitaśrotra）聞くこともなく、よく理解すべきだとの心をもつ様子もみせず、私をからかい、嘲笑し、ひどい言葉を口にしたのです。そこにおいて、私は、三ヶ月の間に、彼らの中の一人として成熟させることができず、疲れ切ってしまいました。わたしは疲れ切ってしまいましたので、立ち去りました。

そのとき、M法王子は、愚かな異教徒たちを五百人、化作し、自分自身をその師として五百人の仲間とともに、ニルグランタの女性の息子であるサティヤカ（以下、NS）のところに行きました。行って、NSの両足に頭をつけて礼拝し、[P 304a] 一面に坐し、NSにこう言いました。『私たちは、聖人を讃える声、偉大な讃歌を聞いて、他の国から [Zh 723] このヴァイシャーリー市にやって来ました。あなたは私たちの師です。私たちは貴方の弟子です。私たちはあなたから教えを受けましょう。[H 432b] ⁽¹¹³⁾沙門ガウタマとその弟子たちを決して見ることなく、〔真理に〕随順しないような法を彼から決して聞くことがないように、そのようになさって下さい⁽¹¹³⁾』

NSが言う。『正しき人たちよ、よろしい、よろしい。確信（*śraddhā）を持つ者よ、浄信（*prasāda）を持つ者よ、あなたは、時を待たずして、私のこの法の教示を理解するでしょう』

その時、NSは自らの仲間たちに言いました。『こちらに来なさい。お前たちはこれらの五百人の学生たち⁽¹¹⁴⁾と喜びを共にし、相和し、⁽¹¹⁵⁾互いにその教えを吟味し合って⁽¹¹⁵⁾、⁽¹¹⁶⁾一緒に住みなさい⁽¹¹⁶⁾。これらの人たちが言うことはどんな些細な事でも、それを⁽¹¹⁷⁾、君たちはしっかりと、よく、保持しなさい』

その時、M法王子は、⁽¹¹⁸⁾仲間である化作した五百人のニルグランタたちと、異教徒の弟子たちと一緒に生活し⁽¹¹⁸⁾、彼らの苦行（*tapas）、誓戒（*vrata）、行動様式（*iryāpatha）、戒行（*śikṣāpada）の通りに〔しながらも〕、常に、相手より自分と仲間たちの方に、勝れているものがあることを示しました。[Mは] 時には、三宝を称讃する言葉を語り、時には、NSの正しい功德を称讃する言葉を語りました。そうして、彼らの信頼を獲得しておいて、別の時、[H 433a] 別のある機会に、集まっていた異教徒たちに、M法王子は、次のように言いました。『若者たちよ⁽¹¹⁹⁾、私たちの論書⁽¹²⁰⁾、マントラ（呪言）、ヴェーダ（聖典）、〔その他の〕文章⁽¹²¹⁾からなるもの〔があるの〕と同じように、かの沙門 [Zh 724] ガウタマにも、正しい功德〔がある〕という称讃が [P 304b] あります。なぜなら、このように、沙門ガウタマは、完全な家系、清浄な両親、転輪聖王の家系に生まれたのです。百の福德相を具え、誕生時にはシャクラ神とブラフマー神に受け取られ、三千大千世界を六種に震動させ、支えられることなく七歩進み、「私は⁽¹²²⁾世間で最も勝れたもの（*jyeṣṭha）、第一の者（*pradhāna）⁽¹²²⁾

であり、「これが」生と死の最後である」との言葉を発しました。二筋の水の流れが現れてシヤクラ神とブラフマー神とローカパーラ神とが〔それで彼を〕洗い、人間界と天界の楽器が〔誰も〕演奏していないのに鳴り出しました。その後、光明が発せられ、すべての悪い生存状態にあるものをそれぞれ救い出し、すべての魔の領域を制圧しました。感覚器官に障害がある者はすべてその障害がなくなりました。その瞬間に、すべての人々のあらゆる煩惱が鎮まり、この上なく幸せな状態となりました。[H 433b] ヴェーダの儀軌に通じたバラモンたちは、「もし家に留まるのであれば転輪聖王となられ、森へと出るのであれば法の王、仏陀となられるでしょう」と告げました。彼は〔予言されていた〕転輪聖王〔の位〕を捨てて出家し、その後、悟りの座において十億(百コーティ)もの魔の軍勢を調伏して、悟りを獲得しました。彼は、世間において、沙門、バラモン、魔、ブラフマー神のいずれもが転じることの出来ない法輪、〔つまり〕法に随順した輪を転じて、⁽¹²³⁾法を教示した(*deśayati)のです。初めもよく、中間もよく、最後もよく、良き意味を含み、[Zh 725] 良き文言を有する〔法と〕、純粹、完全、清浄、潔白な梵行を明らかに示した(*prakāśayati)のです⁽¹²³⁾。

IX-2 プールナ・マイトラヤニープトラの回想(2) 初善・中善・後善の教え

そのうち、その声聞たちにとっての「初めがよい」というのは、つまり、身体のみ活動、言葉のみ活動、心のみ活動です。[P 305a] 「中間がよい」とは、勝れた戒、〔集中する〕心、智慧を学習することです。「最後がよい」とは、空性・無相・無願という解脱への門です。さらにまた、「初めがよい」とは、⁽¹²⁴⁾意欲と勇敢と漫然でないこと⁽¹²⁴⁾です。「中間がよい」とは、留意(正念)と精神集中(三昧)と心の専一性 [H 434a] です。「最後がよい」とは、智慧と観察と知です。さらにまた、「初めがよい」とは、途切れることなく仏陀を信じること、「中間がよい」とは、常に法を信じること、「最後がよい」とは、常に僧団を信じて果報を得ることです。さらにまた、「初めがよい」とは、他から〔よく〕聞くこと、「中間がよい」とは、正しく精神集中すること、「最後がよい」とは、聖なる正しい見解のことです。さらにまた、「初めがよい」とは、苦をよく理解してその生起(*samudaya)を放棄すること、「中間がよい」とは、道を修習すること、「最後がよい」とは、滅(*nirodha)を直証することです。これらが、声聞たちにとっての初めがよいこと、中間がよいこと、最後がよいことです。

それに対して、菩薩たちにとっての初めがよいこと、中間がよいこと、最後がよいこととは何かと言えば、まず、「初めがよい」とは菩提心を捨てないこと、「中間がよい」とは劣等な乗り物(教え)を欲しないこと、「最後がよい」とは [Zh 726] 一切知者性に振り向ける(廻向する)ことです。さらにまた、「初めがよい」とはすべての人々に対して心が平等である大慈であり、「中間がよい」とはすべての人々に対してどのように成すべきかと考える大悲であり、[H 434b] 「最後がよい」とは〔他者のことで〕喜ぶことと⁽¹²⁵⁾無関心で平等な心による深い瞑想(*nidhyapti)⁽¹²⁵⁾のことです。さらにまた、「初めがよい」とは、物惜しみの心(*māt-

sarya)⁽¹²⁶⁾を抑えること、間違った戒 (*duṣṣīla)⁽¹²⁷⁾を捨てること、悪意をなくすこと、怠惰な心を捨てること、⁽¹²⁸⁾→動揺なることはすべて行わないこと^{←(128)}、⁽¹²⁹⁾→間違った智慧^{←(129)}を捨てること、であり、「中間がよい」とは、布施、持戒、忍辱、精進、禅定、[P 305b] 智慧 (六波羅蜜) という装備 (*sambhāra) を完成することです。「最後がよい」とは、六波羅蜜を完成して一切知者性に振り向ける (廻向する) ことです。さらにまた、「初めがよい」とは、〔人々を仏法に〕収め取る四つの事項 (四摂事) によってすべての人々を成熟させることであり、「中間がよい」とは、〔自分の〕身体や生命を見ることなく (不惜身命) 正しい法を護持することであり、「最後がよい」とは、煩惱のない〔正しい悟りの境地〕(*niyāma 正位) に陥るという恐れから守られていることです。さらにまた、「初めがよい」とは、⁽¹³⁰⁾→大地と等しい心を捨てることのない菩薩の行であり^{←(130)}、「中間がよい」とは、進行と後退を熟知することによる退転しない階位 (不退転地) のことであり、「最後がよい」とは、⁽¹³¹⁾→力を獲得することで一回の生〔だけに〕縛られている (一生補処)^{←(131)}ことです。これらが、菩薩たちにとっての初めがよいこと、中間がよいこと、最後がよいことです』

そのようにして、M法王子は、[H 435a] その異教徒の仲間たちの中で、以上のような法を説きました。五百人の異教徒たちが〔諸〕法に関する法の眼が塵なく、汚れ [Zh 727] から離れ、清浄になりました⁽¹³²⁾。八千人の異教徒たちが無上正等覚へと心を起こしました。

その時、化作された五百人の者たちは、地に五体 (両膝・両臂・額) をつけて礼拝し、『仏陀に帰依します (*namo buddhāya)。仏陀に帰依します』と言葉に出して言いました。彼ら〔五百人〕に見習う形で、それらの異教徒の仲間たちも、すべて、地に五体をつけて礼拝し、『仏陀に帰依します。仏陀に帰依します』と言葉に出して言いました。神々の主であるジャクラ神も、彼らに、『汝は、これで世尊に対して供養しなさい』と言って、マンダーラヴァの華を与えました。⁽¹³³⁾

3 おわりに

紙幅の関係もあるので、今回は経の内容に関する考察は省略せざるを得ないが、最後に、VIII-2節に見られる3種の奇蹟 (神変 prātihārya, Pāli pāṭihāriya) についてだけはいくつか付言しておきたい。

「神変」とは「仏・菩薩が衆生の教化のため、超人間的な力によって種々のすがたや動作を現すこと。衆生を救うために、衆生の素質、能力にしたがっていろいろなすがた、形に変じること」(『広説』973頁) の意であり、一般には、奇蹟 (奇跡)、miracle と訳され⁽¹³⁴⁾、本訳でもこれを踏襲している。これを、たとえば、『俱舍論』は、「初めから (ādītas)、非常に強く (ati-artham)、導くべき人々の心 (vineyamanas) を惹きつける (haraṇa) から、prātihārya である。pra- と ati- という辞は〔順に〕『初動 (ādikarma)』と『強力 (bhṛṣa)』を意味

するからである⁽¹³⁵⁾と語源解釈している。さらに『俱舍論』は、⁽¹³⁶⁾ 3種の奇蹟を、神通 (ṛddhi)、記心 (ādeśanā 人々の心を読み取る)、教誡 (anuśāsana) とし、それぞれを、六神通の神足通、他心通、漏尽通に配している。このうち、前2者は、空中を行くことや他者の心の理解という〔世間の〕呪 (具体的には、それぞれガンダーリー、イークシャニカーという呪術) でも可能なことであって、ただ〔人の心を〕惹きつける (āvarjana) だけであるが、教誡の奇蹟は、他のやり方ではなし得ない最上のものであり、それにより、方便の教示を通じて〔教化の相手が〕利益と結びつき、また、望ましき果報と結びつく、としている⁽¹³⁶⁾。ここに見られる3種の内容は、既に注50で触れたおいた『ディーガニカーヤ』第11「ケーヴァッタ経」のそれと同じであるが、ここでは、その内容を詳しく説明している。本経の理解に資すると思われる箇所を見てみよう。

冒頭、ナーランダラーの資産家の息子 (gahapatiputta) であるケーヴァッタは、3度、世尊に「超人法 (uttarimanussadhamma) によって神通の奇蹟を現すことのできる比丘」の指名を要請するが、その理由は、ナーランダラーが世尊に対する信仰がますます厚いところになるように、との願いからである。それに対して世尊は、仕方なく、3種の奇蹟を説くが、興味深いのは、前2者は、それぞれ、ガンダーリー、マニカーという呪術⁽¹³⁷⁾によって達成できる能力であり、〔釈尊はこれらに〕「煩わしきを見ており、愁え、恥じ、厭っている」と表現している点である⁽¹³⁸⁾。また、教誡の奇蹟については、本経VIII-3、IX-2にも見られる「仏陀 (=如来) の出現」「初善・中善・後善の教え」と関連づけてこの奇蹟が説明されており⁽¹³⁹⁾、この点も注目に値する。つまり、「仏陀出世の本懐」である「法の説示」が「教誡の奇蹟」なのである。これらの「3種の神変 (奇蹟)」は注82で言及した『マハーヴァスツ』『入法界品』や、光川 [1985] が報告する『宝積経』「大神変会」のそれとも同じであるが、後者が「教誡神変」をつねに「如来の大神変」とする⁽¹⁴⁰⁾のも、「教誡神変」の重要性を示したものであろう。教化するに相応しい人を仏教に導き入れるためには、世俗的な奇蹟を示すことも必要だが、法の説示による教誡こそが、最上の「奇蹟」、つまり、「如来の大神変」、真の奇蹟なのである⁽¹⁴¹⁾。

一方、本経VIII-2に見られる「3種の奇蹟」は「世俗的な奇蹟 (*saṃvṛtiprātihārya)、教誡による奇蹟 (*anuśāsanaprātihārya)、神通による奇蹟 (*ṛddhiprātihārya)」であって、他とは多少異なるが、以上見てきた諸文献との対比から見ると、「世俗的な奇蹟」というのは、『俱舍論』では「イークシャニカー」、パーリ「ケーヴァッタ経」では「マニカー」という呪術によっても達成される「他人の心を読み取る奇蹟 (ādeśanāprātihārya)」を主に指していると推察される。本経VI-6の「具寿シャーリプトラよ、マンジュシュリー法王子の神通の自由な発揮 (*ṛddhivikurvita) と法の教示の自由な発揮 (*dharmadeśanāvikurvita) の中で、私がわずかながら目の当たりにしたものは、このようなものです」、VIII-1の「私もまた、マンジュシュリー法王子の神通力の奇蹟 (*ṛddhiprātihārya) をいささか目の当たりにしました」という表現は、シャーリプトラを始めとする四大弟子が報告するさまざまな「神通の奇蹟」とそ

の後に掲げられる空性に基づく大乘の教説たる「教誡の奇蹟」の密接な関係を示していると思われる。この「手法」は『維摩経』において存分に発揮されている。

〔略号〕

- Adsp* *The Gilgit Manuscript of the Aṣṭāśasāhasrikāprajñāpāramitā, Chapters 70 to 82, Corresponding to the 6th, 7th and 8th Abhisamayās, edited and translated by Edward Conze, Serie Orientale Roma 46, Roma, 1962.*
- AKBh* *Abhidharmakośabhāṣya* of Vasubandhu, P. Pradhan (ed.), revised second edition with introduction and indices by A. Haldar, Patna, 1975.
- Asp* *Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā*, edited by P. L. Vaidya, Buddhist Sanskrit Texts (BST) No. 4, Darbhanga, 1960.
- BHSD* *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary, Volume II: Dictionary*, by Franklin Edgerton, New Haven, 1953; reprint Delhi, 1970.
- DN* *Dīgha-Nikāya*, 3 vols, PTS., London, 1889-1910.
- Gv* *Gaṇḍavyūhasūtra*, edited by P. L. Vaidya, BST No. 5, Darbhanga, 1960.
- Kṛp* *Karuṇāpuṇḍarīka*, edited with Introduction and Notes by Isshi Yamada, Vol. II, London, 1968.
- LV* *Lalitavistara*, edited by P. L. Vaidya, BST No. 1, Darbhanga, 1958.
- Mv* *Mahāvastu*, 3 vols., É. Senart (ed.), Paris, 1882, 1890, 1897.
- Mvy* *Mahāvīyūtpatti* : 『梵藏漢和四譯對校・翻譯名義大集』鈴木學術財団、1916年。
- MW* *A Sanskrit-English Dictionary*, by Sir Monier Monier-Williams, Oxford, 1899 ; reprint 1982.
- SN* *Saṃyutta-Nikāya*, 5 vols, PTS., London, 1884-1898.
- SP* *Saddharmapuṇḍarīkasūtra*, Kern and Nanjio (eds.), St. Pétersburg, 1912.
- Su* *Suvikrāntavikrāmipariṣcchā Prajñāpāramitāsūtra*, by Hikata Ryusho, Fukuoka, 1958 ; reprint, 1983 (臨川書店).
- Sup* *Suvarṇaprabhāsaśūtram*, edited by S. Bagchi, BST No. 8, Darbhanga, 1967.
- VKN* *Vimalakīrtinīrdeśa, Transliterated Sanskrit Text Collated with Tibetan and Chinese Translations*, edited by Study Group on Buddhist Sanskrit Literature, The Institute for Comprehensive Studies of Buddhism, Taisho University, 2004.
- 『広説』 『広説 佛教語大辞典』中村元著、東京書籍、2001年、縮刷版2010年。

〔注〕

- (1) 翻訳の資料として用いたチベット大蔵経（写本：KPhT、版本：CDHNP）及び漢訳大蔵経（Ch1, Ch2）の詳細については、五島 [2013] 47-48頁の注(1)参照。使用したチベット大蔵経の第3巻の丁数は以下の通り。
 C: 308b3-321a1, D: 268b1-279a7, H: 419a-435a5, K: 211a5-224b5, N: 425a6-442b5,
 P: 295a2-305b7, Ph: 277b4-293b2, T: 223b3-239a7.
 このうち、Kにおいて、第211葉が α (gong)、 β ('og ma) と 2 回繰り返されるが、内容的に増減はない。また、前回に引き続き『中華大蔵経・甘珠爾』（藏文版対勘本、全108冊、2008年）の第51冊所収の本経相当部分も参照した。この大蔵経は上掲5版本の他、ユンロ（永楽）版、リタン版、ウルガ版の異説を挙げているが、版本5版のいずれかに見られるものばかりなので、いちいち言及することはしていない。ただし、活字で印字されており、参照するには便利と思われるので、その頁数（本経第3巻は702頁16行目～727頁9行目）を挙げておいた（Zhと表記する）。[] は2漢訳またはその一方にのみ見られる一節であることを示す。その他の符合、記号については、第1巻（五島 [2013]）での方式に準じる。

- (2) 本節(VII-3)は、第2巻(五島[2014])のVII-1から始まるアーナンダの回想の続きである。突然の風雨のせいで飢餓に見舞われた比丘たちのことを心配したアーナンダが仏陀にその事情を説明し、マンジュシュリーが食を給してくれるだろうとの仏陀の言葉に従い、マンジュシュリーの所に行く。「正午(食事時)になったら木板を叩け」と告げられ何らかの対策が講じられると受け取ったアーナンダは、マンジュシュリーがその僧房から出て来るのを待っていたが、マンジュシュリーは化身を僧房に残し自らは密かに托鉢のためにシュラーヴァシュティーの町に行ってしまった。アーナンダにはそれが見えず(事情がわからず)、マンジュシュリーが悪魔と托鉢をめぐる加持の応酬をしたことや、加持によって鉢には減ることのない食が満たされていることも知らないのである。
- (3) CDHNP: 'khor gyi khyams su (Ph omits: su). KT: khyams zlum por. Ch1: 講堂. Ch2: 迦利羅華園. KTの zlum po (Skt. maṇḍala, vṛtta) は円形の意。伝承によれば、カレーリ樹の後には仏陀の住まい(Karerikuṭika)があり、樹の前が集会所(maṇḍalamāḍaつまり円形の広場)になっていたという(ここが「仏陀の住まい(花林堂)」であったという伝承もある。五島[2013]48頁註11参照)。KTはその「その周辺部に」の意を示しているのであろう。直後では、鉢の置かれていたところが「周辺部(zlum po)」であったことを全ての伝本が示している。
- (4) CDHNP: ma mthong ma thos nas. KPhT: ma mthong nas. Ch1: 不察. Ch2: 不見.
- (5) Tib: gdugs tshod la bab par gyur kyang. Ch1: 飯時已到. Ch2: 乃至食時. Cf. VKN ch. 1 sec. 1: kālah paryantibhūtaḥ (Tib. gdugs tshod la'ang bab na).
- (6) CDHNPPH: gnas khang (*layana). KT: gtsug lag khang (*vihāra). Ch1: 室. Ch2: 房.
- (7) C: 'gaṇḍi. D: gaṇṭi. HN: gaṇḍi. K: 'gaṇ ṭi. P: 'gan te. Ph: 'gen bde. T: 'gan de. Ch1: 捷椎. Ch2: 捷槌. 木板(Pā. gaṇḍi, Skt. ghaṇṭā)は時刻や重要事などを叩いて知らせるもの。インドでは木製が多いが、金属製もある。
- (8) Cf. VKN ch. 9 sec. 10, 11: 「かの化身〔の菩薩〕は食べ物で満ちたその器(bhojanaparipūrṇa-bhājana)をリッチャヴィのヴィマラキールティに献じた。……そのとき、ある声聞たちは次のように思った。『満杯とはいえ、一つの鉢の中の〕このようなわずかな食べ物で、どうしてこれほどの〔大〕集會が食べられるだろうか』と」同じ『維摩経』の冒頭部分では次のような一節がある。VKN ch. 1 sec. 18: 「たとえば、シャーリプトラよ、天子たちは一つの器で食事をするのであるが、功德を積んだ差異によって、美味な神饌を享受する。ちょうどそのように、……」tadyathā śāriputra devaputrāṇām ekapātryāṃ bhūñjanānām yathā puṇyopacayaviśeṣeṇa sudhādevabhojanam upatiṣṭhataḥ, evam eva ….
- (9) Tib: khyod snying las (KT: brtson pa) chung bar byos shig. Ch1: 且止默然而行. Ch2: 汝勿慮是. 蔵訳の snying las は sems khral と同義で「心配」の意。brtson pa は「努力・熱意」の意。ともに Skt. utsuka の訳語と考えられる。直訳は「汝は、(どうしたら良いかと)心配する思い、あるいは、(何とかしたいと)努力する思いを小さくしなさい」という意。以下に挙げる用例が参考になろう。SP 274.20: 「静寂を獲得し、安らかに涅槃に入られているあなたは御心を煩わさないでください」alpotsuko bhava tvaṃ hi śāntiprāpto sunirvṛtaḥ // ch. 12, v. 20cd. (Tib: mya ngan rab 'das zhi snyed pa / thugs las chung ngur mdzad du gsol // thugs は snying の敬語)。他に267.2, 9, 268.2, 271.7(v. 2a)に類似の表現がある。以下の『ラリタヴィスタラ』の例は成道後の釈尊が説法を躊躇している場面である。LV 286.7-9: 「もし、私がこの法を他の人々に教示したとしても、彼らが〔それを〕理解しないならば、それは私にとって疲労であり、間違った努力であり、法の教示としては時宜にかなわないものとなろう。だから私は、心を煩わせることなく、沈黙していることにしよう」ahaṃ ced imaṃ parebhyo dharmaṃ deśayeyam, te cen nājanīyuh, sa me syāt klamatho mithyāvyaṃyāmo 'kṣaṇadharmaśanatā ca. yan nv aham alpotsukas tūṣṇibhāvena vihareyam. 蔵訳は下線部を snying las chung ngur gnas pas とする。289.14-15にも酷似した例がある。
- (10) 『阿闍世王経』に類似の表現が見られる。「文殊師利は巧みな方便をつかい、最高の知恵を身に

つけておられる。功德の光明をそなえ、功德の神足でやってこられる。もし文殊師利に一椀の飯を与えれば、三千大千世界のすべてのひとが食事を要求したとしても、ひとり残らず満腹し、しかも食べ物の量はすこしも減ることがないだろう。だから、二万三千くらいの人數で、どうして心配する必要があるだろう。難しいことはない」(定方 [1989] 114頁)

- (11) Tib: *bsod pa'i bza' ba dang bca' ba dang myang ba rnam*s (CDHNP: dang). Ch1: 種種滋味餽饍甚美甘醴無量. Ch2: 香美衆味. 藏訳は「美味な食べ物、飲み物、味わうべき物」と訳せるが、ここはパーリ仏典や仏伝中によくみられる定型表現に着目して、原文を *praṇitakhādānīyaṃ bhojanīyaṃ āsvādānīyaṃ* と想定して訳しておく。詳細は、*BHSD* の各当該語の項目を参照願いたい。
- (12) CDNP: *phyung*. H: *phung*. KPhT: *byung*.
- (13) Tib: *gos ngan pa*. (**kucela*). Ch1: 胸背悉露.
- (14) Tib: *sna leb leb po*. Cf. *SP* 482.7: *cipiṭanāsāḥ* (Ch: 平鼻, Tib: *sna leb par 'gyur ro*).
- (15) Tib: *zhar ba* (**kāṇa*). Ch2: 鼻眼角眦. Cf. *SP* 482.8: *viparītanetrāḥ* (Ch: 眼目角眦, Tib: *mig log par 'gyur ro*).
- (16) Tib: *theng po dang zha bo dang* (**khañja*). Ch1: 跛蹇. Ch2: 捲手脚跛. Cf. *SP* 482.7: *viparītahastapādāḥ* (Ch: 手脚繚戾, Tib: *lag pa dang rkang pa log par 'gyur ro*).
- (17) Tib: *gzhon pa'i mtha' nas phyag 'tshal zhing rgan pa'i mthar 'dug ste, skye bo mang po'i tshogs gang gis mthong ba'i sems skyo bar 'gyur ba*. Ch1: 心懷邊幃而坐衆中. Ch2: 在下行坐.
- (18) DHKNPPhT: *phyung ste byin kyang*. C: *'gyur ste phyin kyang*.
- (19) Tib: *re res kyang 'bras can* (KPhT: *chan*) *yul ma ga dha'i* (DCN: *ma ga dhā'i*, Ph: *ma ga ta'i*, KT: *bying 'dzin gyi*) *bre bo bcu bcu zos kyang*. Ch1: 極大食. Ch2: 人人各食摩伽陀國十種之食. *bre bo* (**droṇa*) は古代インドにおける嵩を量る単位。上村 [2013] 上巻173-174頁参照。
- (20) Tib: *rung byed rnam*s. Ch2: 諸守園作使之人. 食事時に比丘のために給仕する人 (淨人 *ārāmi-ka*) のことであろう。
- (21) Tib: *lhung bzed rnam kyang yongs su gang la lag pa na'ang kham* (PhT: *kham*) *thogs shing khar bcug pa'i kham yang mid mi nus la*. Ch1: 鉢食常滿, 搏食在口噎不得咽. Ch2: 鉢食不減, 手口俱滿而不能咽.
- (22) Tib: *mgrin pa btsir ba* (Ph: *'grin par*) *bzhin du mig log ste sa la lhung ba*. Ch1: 手食向口手齊口止而皆躡地不能自安. Ch2: 氣閉眼張悉皆躡地.
- (23) Tib: *rgyu dang lta ba dang*. Ch1: 見因緣罪福. Ch2: 見無因緣.
- (24) Tib: *ming dang gzugs dang*. Ch1: 見(因緣罪福)名色所行. Ch2: 見於名色.
- (25) Tib: *bsdus pa dang* (KT: *bsdus shing*) *g'yengs pa dang gzha*g pa dang (KT: *gzhug cing*, Ph: *gzhan pa dang*) *gdeg pa* (KT: *dbyung ba*, Ph: *'degs pa*) dang. Ch1: 有取有受有卒有暴. Ch2: 繫著所依守護取捨. この一節は意味不明。取りあえずKTに従い、原語をそれぞれ、*saṃgraha*, *vikṣepa*, *nikṣepa*, *utkṣepa* と想定して訳しておいた。
- (26) Tib: *nges pa'i gzhi*.
- (27) Tib: *chu bo las rgal bar 'du shes pa*. Ch1: 起二欲作度想. Ch2: 於駛流中不生度想. *Mvy* 403: *oghād uttīrṇaḥ, chu bo las rgal ba*.
- (28) Tib: *rab tu 'dzin pa* (KT: *gdon*, Ph: *'dus byas la bden par 'dzin pa*) dang *rtsod pa* (Ph: *brtson par*) *'bar bar byed pa dang*. Ch1: 鬪訟罵詈. Ch2: 增長諍訟. KTは「悪鬼 (**graha*) との論争に火を燃やすこと」、Phは「有為なるものを真実と捉えること、〔それに〕努力の火を燃やすこと」の意。
- (29) Tib: *mya ngan las 'das pa la 'jigs* (CHNPh: *'jig*) *pa rnam pa bcur 'du shes pa*. Ch1: 壞泥洹之所現. Ch2: 於涅槃中生驚怖想. CDNPhでは「(十種の) 壊れるもの」となる。Ch1はこの読みに近い。

- (30) Tib: kun nas ldang ba med pa. Ch1: 無受住. Ch2: 無結使. Cf. *VKN* ch.6 sec.2: 「[特定の人と] 昵懇になることがないので調和の慈がある」 avirodhamaitry aparyupasthānatayā (Tib: kun nas ldang ba med pa'i phyir).
- (31) Tib: 'byung ba (*niḥsarāṇa). Ch1: 正法藏. Ch2: 出要.
- (32) Tib: 'thab pa (*raṇa). Ch1: 諍訟. Ch2: 怖畏.
- (33) Tib: gdung ba. Ch1: 所起. Ch2: 分別.
- (34) Tib: byams pa (*maitri). Ch1: 不(無)誹謗. Ch2: 無譏呵.
- (35) Ch1: 尊復尊積諸善本教爲佛教. 已脱復脱教爲佛教. Ch2: 善教導導隨宜之法是名佛法. 自説説他法是名佛法.
- (36) Tib: phas kyi (KT: pha rol gyi) rgol ba thams cad chos dang mthun (DP: 'thun. KT: ldan) pas tshar gcod (Ph: bcod) pa. Ch1: 化諸異道. Ch2: 如法調伏諸外道. *Kṛ* 16.10-11: 「(菩薩たちは) あらゆる魔を粉碎する力を持ち、あらゆる異説を唱える者たちを法に従って論破する力をもっている」 sarvamāraavidhvaṃsanabalinaḥ sarvapaparavādināṃ sahadharmaṇa nigrahabalinaḥ. sahadharmaṇa (Tib. chos dang mthun pas) については *BHSD* 587頁参照.
- (37) Tib: slu ba. Ch1: 怒. Ch2: 忿恚.
- (38) Tib: 'dus byas la smod (CDHNP: smon) pas mi rtag pa dang sdug bsngal ba yongs su brjod pa bstan pa'o. Ch2: 明了無常苦無我法是名佛法. 呵毀一切諸有爲故.
- (39) Tib: ya mtshan can thams cad spong bas bdag med pa bstan pa'o. Ch1: 有讚歎罵詈者而無我教爲佛教. 降伏諸道令得靜然教爲佛教. Ch2: 空法是名佛法, 降伏一切諸外道故. Cf. *VKN* ch. 7 sec. 6 v. 22: 「[菩薩たちは] 世間におけるあらんかぎりの異教のすべてにおいて出家する。というのも、種々の間違った見解(邪見)にとらわれた人々を解放するためである」 yāvanto loki pāṣaṇḍāḥ (Tib: ya mtshan) sarvatra pravrajanti te / nānādrṣṭigataprāptān satvān hi parimocayi //
- (40) Tib: ye shes. Ch1: 興智慧. Ch2: 禪法.
- (41) Tib: sham thabs legs par ma gyon pa, bla gos legs par ma bgos pa, gos brtul te gyon pa. Ch1: 衣服不能自正. Ch2: 惡衣著不齊.
- (42) Tib: bya ba sna tshogs kyi (T kyis) mi khom (T: khoms) pas brul (P: bral, Ph: srel) ba. Ch2: 多營衆事.
- (43) Tib: tshe 'di ched che bar byed pa dang tshe rabs gzhan ched mi che bar byed par 'gyur te. Ch2: 其所去來重現法利, 不重後世.
- (44) Tib: bdud rnam yi rangs shing dga' ba dang btang snyoms su 'gyur ro. Ch1: 弊魔悉當歡喜. Ch2: 魔王波旬當大歡喜無復憂慮. 「平静になる」とは Ch2のように「憂いがなくなる」の意.
- (45) Tib: mgo dang gos (KT: mgo'i thod). KT の読みは、Pā. matthaka (頭、頭上) に相当する.
- (46) Cf. *SN* vol.1 53.25-26:
 劍に触れられた者のように、頭が燃えている者のように
 欲望や欲情を捨てるために比丘は遍歴せよ。
 sattiyā viya omaṭṭho ḍayhamāno va matthake /
 kāmarāgappahāṇāya sato bhikkhu paribbajeti //
- (47) Tib: rang gi me'i khams kyis bdag nyid bsregs so. Ch1: 身中放火還自闍維. Ch2: 以火焚身. Cf. *Kṛ* 145.9-14: 「その仏国土では、人々に、老いと病いの苦しみは知られませんように。寿命が尽きる人々はすべて、結跏した状態で涅槃に入りますように。自らの身体から火の元素を発し、それによって、自らの身体を終わらせる (Ch. Taisho No. 157: 自燒其身. No. 158: 自闍維) ように。そして四方から風がやって来て、それらは、菩薩の遺体を、[仏陀の] いない仏国土へと、吹き飛ばしますように」 na ca tatra buddhakṣetre sattvānāṃ jarāvyaḍhiduḥkhaṃ prajñāyeta. yeṣāṃ sattvānāṃ āyuhparikṣayo bhavet, te sarve paryaṅkena parinirvāyeyuḥ, svakāc ca śarīrāt tejodhātuṃ pramuñceyur, yenātmanaḥ śarīraṃ sādhyeyuḥ, caturdiśaś ca

- vāyava āgaccheyuḥ ye tāni bodhisattvaśarīrāṇi śūnyeṣu buddhakṣetreṣu kṣipeyuḥ / 『高僧法顯伝』：阿難思惟。「前則阿闍世王致恨。還則梨車復怨」即於河中央入火光三昧燒身而般泥洹。分身作二分，一分在一岸邊。於是二王各得半身」(Taisho vol. 51 862a17-20)
- (48) CDHNPPH: chos la chos kyi (Ph: kyis) mig rdul med cing dri ma dang bral ba rnam par dag go (*virajo vigatamaḥ dharmeṣu dharmacakṣur viśuddham). KT: rdul med cing rdul dang bral ba te chos la chos kyi mig rnam par dag go
- (49) Ch2: 我時間已悶絕躄地。
- (50) 本経VI-6にも類似の表現が見られる。Cf. *DN* I 212.16-18 : 「ケーヴァッタよ、私が自らよく知り、目の当たりに見て説く奇蹟に次の3種がある。3種とは何かと言えば、神通の奇蹟、記心（〔人の心を読み取って〕言い当てる）の奇蹟、教誡の奇蹟である」 *tiṇi kho imāni kevaṭṭa pāṭihāriyāni mayā sayam abhiññā sacchikatvā paveditāni. katamāni tiṇi. iddhipāṭihāriyaṃ ādesanāpāṭihāriyaṃ anusāsanipāṭihāriyan ti.*
- (51) Tib: bcom ldan 'das de bzhin gshegs pa rin chen srog shing gi sangs rgyas kyi zhing nas... 'ongs par gyur te. Ch1: 從寶英如來佛國而來。Ch2: 從寶王世界寶相佛所來。藏訳の srog shing は「命の木」の意で、*Mvy* 5632によれば「車軸 (akṣa)」、*Mvy* 7164によれば「杖 (yaṣṭi)」に相当する。仏名としては「宝の杖を持つ者」とするのが適切であろうが、ここは漢訳（「寶英」「寶相」）に従って、原語を Ratnaketu (宝を印とする者) と想定しておく。辛嶋 [1998] 14頁によれば、「寶英 (竺法護訳)」「寶相」という仏名の対応 Skt は、Ratnaketur-āja および Ratnasya ketu である。また支婁迦讖とされる『阿闍世王経』では、阿闍世王が地獄を経験した後に生まれる天界（あるいは仏国土）について、その地名を「惟位惟位 (割注：漢言爲嚴淨、竺法護訳：莊嚴)」、仏名を「羅陀那羈頭 (割注：漢言寶好、竺法護訳：寶英)」としている (Taisho vol. 15 403b6-7, 425c21)。なお、阿闍世王はその世界でM法王子に再会し、彼の説法を聞いて無生法忍を得る。羅陀那羈頭は Ratnaketu であろう。Cf. 『文殊師利淨律経』：佛言「東方去此萬佛國土世界名寶氏。佛號寶英如來無所著等正覺，今現在演說道教。文殊在彼爲諸菩薩大士之倫宣示不及 (Taisho vol. 14 448b09-10)。
- (52) Tib: dang po. Ch2: 始初。
- (53) DKTPH: bcom ldan 'das kyang. CHNP:bcom ldan 'das kyi drung na.
- (54) CDHNPPH: dbyar (omitted in CNPPH) gnas par dam bca' (omitted in Ph) mdzad do. KT: dbyar tshul du zhugs so. KT は「雨期の儀式 (*vidhi) に入った」の意。
- (55) Tib: CDHNPPH: dbyar zla ba gsum gnas (omitted in Ph) par dam bcas nas. KT: dbyar tshul du zhugs na.
- (56) Tib: bkad sa (*maṇḍapa). Ch1: 在請會。Ch2: 若於食時。Cf. *MW* maṇḍapa: an open hall or temporary shed (erected on festive occasions), pavilion, tent, temple.
- (57) Tib: gso sbyong (KT: sbyin). Ch1: 説戒中。Ch1: 若説戒日。
- (58) Tib: phyag 'tshal ba'i las. Ch2: 僧行次。
- (59) Tib: de nas dbyar zla ba gsum zad de 'das pa dang, gso sbyong (KT: sbyin) dang dgag dbye'i (tshul nas 'byung ba'i) tshe 'jam dpal gzhon nur gyur pas bzhin bstan to. Ch1: 於是文殊師利竟夏三月已説戒，尚新時來在衆中現。Ch2: 過三月已，臨自恣時乃見其面。Tib. bzhin bstan を mukhaṃ darśayati の意に取る。Cf. *Mvy* 3411: samantaspharaṇamukhadarśnaḥ, kun khyab bzhin ston.
- (60) Ch1: 和悦王宮采女中及諸姪女小兒之中三月。Ch1: 我住在是舍衛大城波斯匿王后宮一月。復一月住童子學堂。復一月住諸姪女舍。
- (61) Ch2: 心甚不悅。
- (62) Tib: sems dpa' (*sattva) 'di lta bu ltung ba dang bcas pa dang. Ch1: 何緣如此等人。Ch2: 云何當共是不淨人。
- (63) CDHNPPH: dgag dbye byar. KT: tshul nas 'byung. KT は「儀式から出る」の意。

- (64) Tib: 'khor gyi khyams (*maṇḍalamāḍa). Ch1: 講堂. Ch2: 堂.
- (65) Tib: bskrad pa. Ch1: 逐出. Ch2: 擯.
- (66) Ch1: 仁寧見摩訶迦葉搥捷榿不乎. Ch2: 汝往看是摩訶迦葉. 今者何故打捷榿也.
- (67) Tib: khyod la ma dad pa chen po byed par mi 'gyur par bdag nyid tshangs par byos shig. rang gi spyod yul ston cig. nyan thos chen po rnams mgu bar byos shig. Ch1: 仁自現境界神通變化. 無令迦葉起亂意向仁. Ch2: 今可現汝自在神力神通境界. 令彼聲聞心得清淨, 勿於汝所生不淨心.
- (68) Tib: btsun mo'i 'khor du gnas nas. Ch1: 而靜不現潛去止宿藏匿之室. Ch2: 住王后宮及姪女舍.
- (69) CDHNPPH: dgag dbye bgyid par 'tshal te. KT: tshul nas 'byung bar 'tshal te.
- (70) CDHNPh: je (*tāvat). KPT:de.
- (71) Tib: kho bo ngo tsha ba'i tshul gyis. Ch1: 我即慚愧.
- (72) Tib: rgyun ma chad par sgra byung ste. Ch1: 盡現神力. 捷榿不肯墮地正住不動.
- (73) Tib: chad pa med, lhag pa med, skyes pa med par de bzhin du byed par snang ngo. Ch1: 無異審諦自在.
- (74) Ch2はこの部分を欠く。
- (75) Ch1のみ。
- (76) Tib: 'jam dpal gzhon nur gyur pa la bzod pa gsol lo. Ch1: 願世尊赦我所犯殃咎. Ch2: 聽我悔過.
- (77) CDHNPPH: dbyar gnas par dam pa'i bcas pas kyang. KT: dbyar tshul du zhugs pas kyang.
- (78) Tib: smad 'tshong ma . Ch2: 姪女. Cf. VKN ch. 7 v. 32ab: 「彼ら(菩薩たち)は、男たちを惹き付けるために意図して(*saṃcintya) 娼婦(gaṇikā, Tib: smad 'tshong)となる」
- (79) Tib: rab tu bzung ba (*pragraha). Ch1: 共行. Ch2: 護持. Cf. MW pragraha: friendly reception, kindness, favour.
- (80) Tib: tshar gcad pa (*nigraha). Ch1: 遊觀供養. Ch2: 威伏.
- (81) Tib: bkod pa chen po (*mahāvīyūha). Ch1: 大清淨行. Ch2: 大莊嚴.
- (82) 『マハーヴァツツ』には別の「3種の奇蹟」が挙げられている。Mv I 238.4-4: 「諸仏・諸世尊は、神通の奇蹟、記心の奇蹟、教誡の奇蹟という3つの奇蹟によって人々を教導する」 trihi prātihāryehi buddhā bhagavanto satvāṃ vinenti ṛddhiprātihāryeṇa ādeśanāprātihāryeṇa anuśāsaniprātihāryeṇa. これは既に注50で挙げた『ディーガニカーヤ』の例と同じ内容である。また、このような例もある。Gv 4.26-28: 「如来と全ての有情の心の有り様に応じて、仏陀の影像の顯現をお示し下さい。如来が有情のために自由に発揮する様々な奇蹟をお示し下さい。如来がすべての有情のために〔現す〕説法と教誡の奇蹟をお示し下さい」 tathāgatasarvasattvacittagatiṣu buddhapratibhāsavijñaptir api saṃdarśayet. tathāgatasattvavikurvita-prātihāryāṇy api saṃdarśayet. tathāgatasarvasattvadeśanānuśāsaniprātihāryāṇyapi saṃdarśayet. 第1文の原文は読みづらいが、「記心の奇蹟」のことを指しているのかも知れない。
- (83) Tib: 'jigs pas bsdigs pa (*bhayatāḍana). Ch1: 恐懼色像.
- (84) Tib: de dag bya ba'ang sna tshogs pa nyid kyis yongs su smin par 'gyur te. Ch1: 亦爲説若干種法而得入道. Ch2: 以雜種法而調伏之.
- (85) 衆生界(人々の世界)・虚空界(空間の世界)・法界(法の世界)については『入法界品』の次の一節が参考になる。Gv 3.24-26: 「(菩薩たちは) 願いのままに世界に形姿を示現するという点で、虚空界のごとき最勝の智の境界は清淨で妨げがなく、衆生なく生きる者なき衆生界を善く知っているという点で、眼翳を離れており、すべての法界に光明の網を遍満させるという点で、虚空に等しき智慧をもっていた」 ākāśadhātuparamajñānagocaraviśuddhyanigṛhitair yathāśayajagadrūpakāyasamdarśanatayā, vitimirair niḥsattvanirjivasattvadhātuparijñayā. gaganasamaprajñaiḥ sarvadharmadhāturaśmijālaspharaṇatayā.

- (86) Ch1: 我雖見有佛將爲得無所益乎。亦不能有所教授度脫人也。佛法爲空無人，何者有教度脫乎。
Ch2: 佛空出世無所調伏。
- (87) Tib: mkhrim pa'i rims kyis btab ste. Ch1: 得熱病。Ch2: 熱病。古代インドにおいては、風 (vāta, Tib: rlung)、胆汁 (pitta, Tib: mkhris pa)、痰 (śleṣman, Tib: bad kan) によって種々の病が引き起こされると考えられていた。Cf. *Asp* 49.13: 「[その宝石は] 胆汁 [の熱に] 焼かれている人の身体に置けば、その人の胆汁を抑え、増大させず、鎮めてしまうだろう」 pittenāpi dahyamāne śarīre sthāpyeta, tasya tad api pittam nigṛhṇīyāt, na vivardhayet, upaśamayet.
- (88) Tib: rnam pa sna tshogs su bla bar gyur pa dang. Ch1: 其人作種種調言嚙語。Ch2: 是人種種妄有所説。
- (89) Tib: mar (*ghṛta, navanīta). Ch1: 湯藥。Ch2: 酥。Skt. ghṛta (Hind. ghi, Eng. ghee) は牛 (あるいは山羊、水牛) の乳を煮て冷やし、その表面にできた表皮から作ったもの。ヨーグルトに似ているが酸味がある。Skt. navanīta は精製されたバター。いずれも胆汁や風を和らげたり、あるいは除いたりする効能があるとされる。なお、ghṛta は灯明の燃料としても用いられる。
- (90) Tib: dpe bstan pa (*udāharaṇa). Cf. *Asp* 106.30-31: 「世尊よ、私にひらめくものがあります。スガタよ、私に比喻による話がひらめきます。たとえば、……」 pratibhāti me bhagavan, pratibhāti me sugata aupamyodāharaṇam. tadyathāpi nāma
- (91) CDHNPPH: 'di lta bu'i phyir sangs rgyas 'byung ste, 'di lta ste, mnyam pa nyid yang dag par bstan pa'i phyir te. KT: 'di lta ste, sangs rgyas 'byung ba'i don ni mnyam pa nyid bstan pa'i don yin te. KT は「つまり、仏陀の出現の目的は、平等性の教示ということである」という意。
- (92) Tib: go cha (*saṃnāha). Ch1: 徳鑑。Ch2: 莊嚴。Ch2は「誓莊嚴」「大莊嚴」とも呼ぶ。
- (93) Tib: zhum par mi 'gyur, rangs par mi 'gyur zhing. Ch1: 亦無所著亦不諍亂。Ch2: 不沒不出。
- (94) Tib: rang bzhin gyis yongs su mya ngan las 'das pa'i sems can rnam. Ch1: 清淨自然度於無爲。Ch2: 衆生之性畢竟涅槃。
- (95) CPPH: brag cha. DHN: brag ca. KT: sgra brnyan.
- (96) Tib: chos kyi dbyings su yang dag par (omitted in KT) 'du (Ph: 'dul) ba. Ch1: 法界平等。Ch2: 解達諸法平等。
- (97) Tib: phas kyi (Ph: kyi) (KT: pha rol gyi) rgol ba thams cad chos dang mtshun pas (DPh: 'dun pas, KT ldan par) shin tu tshar gcod pa. Ch1: 以正法化諸異道。Ch2: 降伏一切外道。和訳には『金光明經』の次の一節を参考にした。*Sup* 43.20: 「すべてのライバル、すべての敵たちは、法に従って、制圧(教化)されるでしょう」 sarvapatyarthikāś ca sarvaśatavaś ca sahadharmaṇa sunigṛhītā bhaviṣyanti (Tib. shin tu tshar chod par 'gyur ro). Tib. chod は gcod の未来形。
- (98) Tib: phung po thams cad spong ba. Ch1: 願入一切勾迹共相習樂。Ch2: 一切悉捨無餘。
- (99) Tib: tshul khriṃs dang bslab pa dang sbyangs pa'i yon tan gyis (T: gyi) yo byad bsnyungs pa (Ph: bsnyung ba) thams cad yang dag par len pa. Ch1: 爲一切衆生積累戒忍功德。Ch2: 集戒頭陀功德。Cf. *VKN* ch. 7 sec. 1 「(菩薩は) すべての戒・学処・頭陀の功德・節制(少欲知足) にしっかりと身を置いている」 sarvaśīlaśikṣādhutagaṇasaṃlekhaṇapratīṣṭhitāḥ.
- (100) Tib: sor mo lnga dang nam mkha' mnyam pa. Cf. *Su* 28.5-6: 「空間において五指 [ほどもその実体が] 完成することなど誰もかつて見たことはない」 ākāśe na jātu kenacit pañcāṅgulipariniṣpattir drṣṭapūrvā. Ch1: 視五道得如虛空。Ch2: 解知五道虛空。ここは2漢訳にしたがって、五指 (*pañcāṅguli) ではなく五道 (*pañcagati) とするべきかもしれない。
- (101) Tib: rnam par grol ba (T: ba'i) lag mthil du 'ongs kyang thob par mi byed pa. Ch1: 觀脫如掌無所疑。Ch2: 猶如掌中觀見解脫無疑。2漢訳は「解脫は掌中にあるものの如く確實で疑いがない」という趣旨。

- (102) Tib: bsam pa thams cad yongs su rdzogs par byed pa'i mtshan nyid. Ch1: 具足諸願. Ch2: 修滿大神通智.
- (103) Tib: skyon med par (KT: nge par) mi ltung ba. Ch1: 諸冥無有迹. Ch2: 不畏墮彼聲聞緣覺地.
- (104) Tib: thams cad yid la mi byed pa. Ch1: 不思一切蓋. Ch2: 不念諸法無我.
- (105) 「死刑執行人(刺客)」「毒蛇」「空虚な村」の一連の比喩については『雜阿含經』第1172經 (Taisho vol. 2 313b14-314a1) および SN IV 173-175を参照。この寓話には「空虚な村 (= 内的な六つの感覺器官)」を襲撃する「村を破壊する盜賊」が出て来るが、これは「外的な六つの感覺対象」の比喩であり、本文中の「対象 (*gocara)」に相当する。
- (106) Tib: kun gzhi. Ch1: 起有念. Ch2: 樛窟. Skt. ālaya には、住処・家宅、愛着・好み、執着処の意味がある。ここでは家宅と愛着(執着)の両者を含意していると思われる。
- (107) Tib: ched du srid pa len pa. Ch1: 審諦受諸有. Ch2: 決定攝取諸有. Cf. VKN ch. 1 sec. 3: 「意図をもって輪廻的生存状態に生まれることを示す者(菩薩たち)によって」 saṃcintyabhavagatyupapattisaṃdarśayitṛbhiḥ.
- (108) Ch1: 其勇猛大力之人所被鎧, 下劣不肖之子亦被是鎧耶. Ch2: 如大健夫以諸鎧仗, 善自莊嚴執持利刀. 有怯弱人粗自莊嚴. 是二莊嚴可相比不.
- (109) Ch1: 維耶離. Ch2: 毘舍離菴羅樹林.
- (110) Tib: gcer bu. Ch1: 尼捷. Ch2: 尼乾. 藏漢ともその原語は nirgrantha (原意は「結び目・束縛を離れた者」)であろうが、Tib. gcer bu は「裸形」の意であり、Skt. nagna, acela に対応する。Ch1には他に「諦裸形子」の訳語も見られ、訳者竺法護は nirgrantha を「裸形行者」と解しているようである。Nirgrantha は一般にはジャイナ教徒のこととされるが、広く裸形行者を指す語としても用いられるので、本經では「裸形行者」の意で「ニルグランタ」としておく。
- (111) Tib: gcer bu ma'i bu bden pa po (*Nirgranthīputra-Satyaka, Pā. Niggaṇṭha-Saccaka). Ch1: 薩遮尼捷弗. Ch2: 薩遮尼乾陀子. 『ジャータカ』第35話によれば、議論好きのリッチャビ人は、よそからやって来た男女のニガンタ (nigaṇṭha, nigaṇṭhi) を議論させたが、両者は同等の力量であったので二人を結婚させてそこに住ませた。二人には女の子が4人、男の子が1人生まれたが、この男の子がサッチャカ (Saccaka, Skt. Satyaka) といい、両親から五百ずつ、合わせて千通りの議論を学んでいた、という。『マッジマニカーヤ』第36經「小サッチャカ經」によれば、ヴェッサリー市に住む議論好きの「ニガンタの子サッチャカ (Nigaṇṭhaputto Saccako)」は、五百人の弟子をつれて仏陀のもとを尋ねて、論破されると自らの園林において仏陀とその僧団に食事を提供した。また、第36經「大サッチャカ經」では、サッチャカはジャイナ教のニガンタ・ナータプッタを始めとする六師外道とも議論したという。また『ブッダチャリタ』第21章第16偈には、ヴァイシャリー市における仏陀の教化の対象として「サチヤカ」の名が挙がっている。大乘經典の『大薩遮尼乾子經 (Skt. *Bodhisattva-gocaropāya-viṣaya-vikurvāṇa-nirdeśa, *Mahā-satya-nirgrantha-putra-vyākaraṇa-sūtra)』(Taisho No. 272) は、この人物像を中心モチーフとした經典である。
- (112) Ch1: 與六萬比丘衆圍繞供養於佛.
- (113) Ch1: 當頂受其命觀如瞿曇. 吾未曾聞大沙門說柔順妙法. Ch2: 令我不見沙門瞿曇, 我不聞彼相違法.
- (114) Tib: bram ze'i bu. Ch1: 學志. Ch2: 摩納. 藏訳は文字通りには「バラモンの子」であるが、ここは漢訳を根拠に、原語を māṇava (Tib. bram ze'i khye'u) とする。māṇava は「(特にバラモンの) 学生、青年」の意。
- (115) Tib: phan tshun chos la dpyad pa dpyod cing. Ch1: 轉相受法化等共學經義. Ch2: 互相諮問.
- (116) Tib: lhan cig tu gnas par gyis shig (KT: spyod cig). Ch1: 通同爲行. Ch2: 同住.
- (117) Ph: de yang. KT: de'ang. CDHNP: deng.
- (118) Tib: 'khor gcer bu pa lnga brgya sprul pa dang gzhan mu stegs can gyi nyan thos rnamdang lhan cig tu 'dug nas. Ch1: 與五百學志等輩聚會. Ch2: 及五百化弟子聽次第坐. 先の記述と2

漢訳を参考にすれば、藏訳は「仲間である化作した五百人の異教徒たちと、ニルグラタの弟子たちと一緒に生活し」とすべきであろう。

- (119) Tib: tshe dang ldan pa dag (*āyusmat).
- (120) CDHNPPH: bstan bcos pa (Ph: chos). KT: gtsug lag. 想定原語はいずれも śāstra.
- (121) CDHNPPH: gzhung (*grantha). T: klog pa (*pāṭha, nipāṭha). K: klag pa.
- (122) Tib: thu bo gtso bo (omitted in CDHNP) . Ch1: 天上天下最尊. Ch2: 於一切世中最勝世中最大.
- (123) Cf. *SP* 17.11-13 :sa dharmam deśayati smādau kalyāṇam madhye kalyāṇam paryavasāne kalyāṇam svartham suvyañjanaṃ kevalam paripūrṇam pariśuddham paryavadātam brahmacaryam samprakāśayati sma. いうまでもなく、この定型的表現は、仏伝中のいわゆる「伝道の宣言」のエピソード（例えば、*SN* vol.1 105-106）に由来する。
- (124) Tib: 'dun pa dang brtson 'grus dang bag yod pa. Ch1: 信寂無放逸. Ch2: 信欲不放逸.
- (125) Tib: btang snyoms mnyam pa'i sems kyis (T: kyi) nges par sems (KT: rtog) pa (Ph: dpa').
- (126) Tib: ser sna'i (KT: 'jungs pa'i) sems.
- (127) Tib: 'chal pa'i tshul khriṃs. KT: ngang tshul ngan pa.
- (128) Tib: rnam par g'yeng ba kun tu mi spyod pa. KT: g'yeng ba mi spyod pa.
- (129) CDHNPPH: 'chal pa'i shes rab. KT: shes rab 'chal pa.
- (130) Tib: sems sa (omitted in CHNPPH) dang mtshungs pa mi gtong bas byang chub sems dpa'i spyod pa'o. Ch1: 持心如地奉菩薩行而無合會. Ch2: 如地等持不捨一切菩薩行心.
- (131) Tib: dbang thob pas skye ba gcig gis thogs pa ste. Ch1: 心無所著得一生補處. Ch2: 於一生灌頂正位.
- (132) CDHNPPH: chos kyi mig rdul med cing dri ma dang bral ba rnam par dag go. KT :rdul med cing dri ma dang bral te chos la chos kyi mig rnam par dag pa'o.
- (133) チベット訳第3巻はここで終わるが、プールナ・マイトラーヤニープトラの回想は第4巻でもしばらく続く。
- (134) たとえば、『パーリ仏教辞典』（村上真完／及川真介編、春秋社、2009年）、『漢訳対照 梵和大辞典』（増補改訂版、講談社、1979年）、*BHSD*、*MW* 等の当該項参照。
- (135) *AKBh* 424.11-12. 訳文は、櫻部 [2004] 180頁を参照した。なお、櫻部訳は prātihārya を「示導」とする。
- (136) *AKBh* 424.10-425.3. 櫻部 [2004] 180頁。
- (137) それぞれ、片山 [2003] 324頁注1、326頁注3を参照。
- (138) 対応漢訳（『長阿含経』第24「堅固経」）では、〈「神足」には「神足」「観察他心」「教誡」の3種があるが、前2者を称讃する言葉は「毀謗」する言葉であり、それゆえ、世尊は、そのような「神変化」は現さず、ただ弟子たちには「空閑処」における「黙思」の道を教え、功德があればそれを隠し、過失があればそれを懺悔するようにと指導するだけである。これこそが、「我が弟子たち」が現す「神足」なのである〉としている（*Taisho* vol.1 101c09-102a11）。
- (139) 片山 [2003] 327頁。
- (140) 光川 [1985] 170頁）。
- (141) Cf. *Adsp* VIII 5, 1a :「[私は] 菩薩大士が意図的に大地獄に堕ち、大地獄の苦を鎮めてから、3種の奇蹟、つまり、神通の奇蹟、記心の奇蹟、教誡の奇蹟によって、地獄の有情に法を説くのを観察する。…… [菩薩たちは] 大地獄から出て、神々と人間の領域へと再生し、順次、3種の奇蹟を用いて、苦を終わらせるのである」

【参考文献】

- 上村勝彦 [2013] : 『実利論』 岩波文庫。
- 片山一良 [2003] : 『長部（ディーガニカーヤ）戒蘊篇II』 大蔵出版。

- 辛嶋静志 [1998]: *A glossary of Dharmarakṣa's translation of the Lotus Sutra*, Bibliotheca Philologica et Philosophica Buddhica I, International Research Institute for Advanced Buddhism, Soka University, Tokyo.
- 五島清隆 [2013]: 「チベット訳『宝篋経』一和訳と訳注(1)」『佛教大学 仏教学部論集』#97、29-56頁。
- [2014]: 「チベット訳『宝篋経』一和訳と訳注(2)」『佛教大学 仏教学部論集』#98、27-54頁。
- 櫻部建等 [2004]: 櫻部建・小谷信千代・本庄良文『俱舎論の原点研究 智品・定品』大蔵出版。
- 定方 晟 [1989]: 『阿闍世のさと一仏と文殊の空のおしえ』人文書院。
- 光川豊藝 [1985]: 「宝積経「大神変会」の研究—三種神変と菩薩の行について」『龍谷紀要』#7(1)、163-179頁。

【付記】本稿では「3種の奇蹟(神変)」について十分な考察ができなかったが、別稿(「文殊菩薩と3種の奇蹟(prātihārga)」『佛教大学 仏教学部紀要』第20号、2015年3月)で論じているので参照願いたい。

(ごしま きよたか 非常勤講師)

2014年11月17日受理